

日月様

坂口安吾

青空文庫

私が精神病院へ入院しているとき、妙な噂が立った。私が麻薬中毒だというのである。

警視庁から麻薬係というのが三人きて、私の担当の千谷先生や、係の看護婦がひどい目にあったらしい。二時間にわたってチンプンカンプンの応接に苦しんだということをきいた。さすがに東大病院は、患者に会わせるようなことはしない。会えば誤解は一度に氷解するが、麻薬中毒とは別の意味で患者が怒りだし、それによって、せっかくの治療がオジヤンになる怖れがあるからであろう。

科長の内村先生（大投手）担当の千谷先生（大捕手）のお許しで後樂園へ見物を許された。後樂園のない日、千駄木町の豊島与志雄先生を訪ねた。豊島さん曰く、

「君、麻薬中毒なんだろう」

「違います。催眠薬の中毒はありましたが、麻薬中毒ではありません」

「おんなじじゃないか」

私は逆らわなかった。

そのうち酒がまわり、談たまたま去年死なれた豊島さんのお嬢さんの話になった。腹膜で死んだのだ。非常な苦痛を訴えるのでナルコポンを打ったという。すぐ、ケロリと痛み

がとまったそうである。

そこで、拙者が、云った。

「ナルコポンというのは麻薬です。太宰がはじめて中毒の時も、パントポンとナルコポンの中毒だったそうです。僕の病院では重症者の病室がないので、兇暴患者が現われると、ナルコポンで眠らせて松沢へ送るそうです。これはモヒ系統の麻薬です。僕の過飲した睡眠薬は、市販の、どこにもここにもあるというヘンテツもないシロモノです」

「へえ、じゃア、睡眠薬と麻薬は違うの？」

と、豊島さんは目を丸くした。

日本の代表的文化人たる豊島さんでも、こういうトンマなことを仰おつしや有るのである。私が麻薬中毒というデマに苦しめられたのは、当然かも知れない。

私が退院する一週間ほど前の話である。

王子君五郎という三十ぐらいのヤミ屋がヒョッコリ見舞に來たのである。私は自分勝手にヤミ屋とアツサリ片附けたが、王子君五郎氏は異論があるかも知れない。

私が彼と知りあったのは、戦争中の碁会所であった。当時の彼はセンバン工であり、同時にあとで分ったが、丁半の賭場へ通っていた。然し本職のバクチ打ちではない。お金の

必要があつて、時々でかけるらしいが、いつもやられるのがオキマリのようで、工場も休んで、たいがい碁会所へ来ていたが、いつも顔色が冴えなかった。根は非常にお人好しで碁は僕に井目^{せいもく}においても勝てないヘタであつたが、熱中して打っていた。彼氏の賭場に於ける亢奮落胆が忍ばれるようであつた。

碁だけなら、さのみツキアイも深まらなかつたのだろうが、夕頃、国民酒場へ行列というダンになつて、私は彼氏の恩恵を蒙つたのである。行列の先頭を占めている三十人ぐらゐは、みんなバクチ打ちである。その中へ彼も遠慮深くはさまっていたが、私を見つけて自分の前へ入れてくれる。これがどうも、前後左右のホンモノのヨタ者連に比べて、まことに威勢がなく、一人シヨンボリ冴えない感じで、入れて貰う私が、羞しく、又、非常に彼が痛々しかった。

三月十日の大空襲で、日本政府が大いに慌て、私の住む工場地帯は俄に大疎開を行うことになり、たった一つの区で、二万戸の家を叩きつぶすことになった。これが一週間ぐらゐの短時日に終了するという命令である。空襲とオツカツぐらいに上を下への大騒ぎだ。町の到る所で、学徒隊が屋根をひつpegし、柱を掘り倒し、戦車も出動して、家を押つぶす。濛々たる土煙り、その中を疎開の人々が右往左往に荷物を運んでいる。この一区の

大疎開によって、タンスなども二十円ぐらいに値下りしたというぐらいなものであった。

そのくせ、家を叩きつぶして百米道路メートルを何十本つくってみたって、ふだんの火事と違う。火の手が一ヶ所からくるわけではなく、焼夷弾をマンベンなくバラまかれるのだから疎開道路などは一文の値打もないのである。後日完全無欠の焼け野原となり、もうけたのは町会長とか、そういう連中で、疎開でねじ倒した材木だけ焼やけないのがあったから、無断チャクフクして旬日ならずして新築した。

王子君五郎君も、哀れ、疎開の運命となった。賭場などへ通い、国民酒場の行列の先頭組のくせに、まったく能がないのである。荷造りし、それを田舎へ運ぶ段取りが手際よく行かない。荷物の発送が誰よりおくれて、そのとき、私の家へ一週間ばかり泊めてやった。終戦直後、上京した時、さっそく私を訪ねてきて、私の一室へ住みたそうであつたが、近所の罹災組がたくさんいて、まるで収容所のようなものだから、彼氏の居る場所がない。三四日泊って、ほかに部屋を見つけて引越した。

その後、まだマーケットなど、いうものがハッキリした形で出来上らない路上で、彼が品物を売ったり買ったりしているのを見かけた。私が彼をヤミ屋とよんだのはそのせいである。それも半年ぐらいのもので、まもなく彼の姿は私の散歩区域では見かけることが出

来なくなつたのである。それから三年すぎていた。

精神病院で、王子君五郎氏の訪問をうけて私も呆れた。そのときは、付き添いも女房も外出して、私一人であつたが、特別私とレンラクのあつた人物のほかは、精神病院の錠を下した関所を越え、又、看護婦の認可という関門を越えて、私の病室をつきとめて辿りつくということは不可能なのである。忍術使用と同じぐらい腕力的な侵入方法に練達している各新聞社の社会部記者や写真班すら、みんなお医者さんや看護婦に撃退されて、あえなく退却させられていたのである。

「よく、はいつてこられたね」

と、いうと、彼はヘツヘツヘツと笑つて、フトコロから品物を取り出した。

「いつもお世話になりました、お礼もできませんで、これは私の寸志でございます。先生もさだめしお苦しいことだろうと拝察致しまして、私もマア、ちょツと、顔がきくようになりましたもので、どうやら手に入れて参りました」

「なんですか」

彼は又クスリと笑つて、頭をかいて、それから注射の恰好をしてみせた。

「なんだい？ ヒロポンかい？」

「ど、どう致しまして。あれです。先生がお用いになっていた例の、麻薬」

私もつくづく呆れてしまった。デマの結果が、こういう珍妙な事実になって現われようとは。

「麻薬って、君、モヒのことかい」

「そうです。イエス。エッヘッヘ」

彼は又、頭をかいた。クスリと笑いつづけている彼の目に、妙に深々とした愛情がこもっていた。

「私自身は、これを用いておりませんが、よく知っているんでございます。中毒して入院する。入院中もぬけだして、ちょつと、用いにおいでになるもんですなア。骨身をけずられるようだてえ話を、マア、私もチョイ／＼耳にしておりますんで、先生なんざ、愚連隊というものじゃなし、仲間のレンラクもなく、お困りだろうと、エッヘッヘ。そうなんぞございます。この精神病院なぞと申しまして、鉄の格子に、扉に錠など物々しくやっておりますが、私共の方では、お茶の子なんでしょう。みんなレンラクがありまして、ワケのないことござんすよ。鉄格子から注射器と薬を差入れてやりや、なんのこともありませんや。愚連隊の中毒患者は、病院の中でのいかにも神妙に、みんな用いておりますんで。

エッヘッヘ。文明でござんす」

「へえ。文明なもんだねえ」

と、私もまったく感服した。そして彼の厚意に、まことに極みなく清らかなものを感じて、ホロリとするほど心を打たれたが、それだけに、デマにすぎない実情を事をわけて説明するのに、甚しく心苦しい思いであつた。

私の訥々^{とつとつ}たる説明をきき終ると、彼は非常に情けなそうな顔になつた。私は彼を慰めるのに骨を折つたほどである。

「御退院もお近いようで、御元氣な御様子を拝見致しまして」

と、彼は急に、改つて、よそ行きのような別なお愛想を言いだした。

「あんまり、つめてお考え遊ばしますからでございましょうが、又、先生が、華々しくお活躍あそばす日も近いだろうと思ひますと、私のような者でも、心うれしく、甚だ光榮でございます。御退院の節は、ぜひお立ち寄り下さいまして」

と、住所をコクメイな図面入りに書いて歸つた。そこはさる盛り場の碁会所で、自分の家ではないけれども、昼間は、必ずそこにいるからと云つた。

退院してまもない夕方であつた。彼の住む盛り場の近所へ所用があつて出向いたが、そ

こは私の始めての土地で、おまけにその日は一人であり、知っている土地へ戻って一杯やるのもオツクウであり、さりとて飲むべき店も見当がつかない。私は王子君五郎氏を思いだした。彼の厚意に報いるにもよい機会だから、誘いだして、このへんで一杯のもうと思つたのである。

碁会所はすぐ分つた。

「王子君五郎さんはいますか」

ときくと、二人の娘がしばらく額をよせ集めてヒソヒソ話していたが、

「あゝそう、君ちゃんのことよ」

と、一人が大声で叫んだ。

「なんだ。君ちゃんか」

二人の娘は笑つた。

「君ちゃんは、もう、いません、お風呂へ行つた筈ですから、今日はもう来ませんわ」

「どこかへ行けば、会える場所があるんですか」

「それは、お店よ」

「お店？」

「御存知ないんですか。カフェー・ゴンドラと云いましてね、その露路の中程にあります。もう、出たころでしょう。でも、まだかも知れないわ」

私は礼をのべて、その露路へ行つた。そこは軒なみにカフェーの立ち並んでいる所で、各々の戸口に美人女給が立つて、露路へ迷いこむ通行人を呼びこみ、時には手を握つて引っぱりこもうとしたりした。

私はゴンドラを見出してズカズカはいつた。王子君五郎氏はそのバーテンだろと思つたのである。然し、バーテンダーは彼氏ではなかった。見廻したが、まだ、ほかにお客が一人もおらず、女給のほかに男は見当らなかった。

「この店に王子君五郎という人がいるときいたんですが、もしや、常連にそういう人がおられませんか」

「君ちゃんでしょう。えゝ、おります」

と、こゝでは躊躇なくズバリと答えた。

「君ちゃん。お客様よ」

と、一人は奥へよびかけた。

これから、どういう事が起つたか、ということについては、二十の扉や話の泉でかねて

頭脳練成につとめている皆さん方、お分りですか。あと、三十秒。鐘が鳴らなかつたら、皆さん方は、当事者の私よりも、御練達の士なのである。

王子君五郎氏はまさしく現われてきたのである。然し、これを君五郎氏と云つては、あるいはよろしくない。君ちゃん、である。然し、君ちゃん、と云うのも異様であるが、動物園の象に花子ちゃんとか、それで通用する世間でもあるから、君ちゃん、それでよろしいのだろう。ジキル氏とハイド氏ほど悪魔的なものではない。

現われ出でたる君ちゃんは女であつた。然したしかに、王子君五郎氏でもあるのである。上野の杜^{もり}では、すでにオナジミの極めてありふれた日本の一現象にすぎないのかも知れないが、センバン工王子君五郎という、決して女性的ではなく、むしろズングリと節くれた彼氏を知る私にとって、この出現が奇絶怪絶、度胆をぬかれる性質のものであつたことは、同情していたゞかなければならない。

君ちゃんはまさしく女装であつたが、女装であるという以外に、女らしいものは何もなかった。第一、普通の男娼なら、女の言葉を用いるだろう。君ちゃんはそうではない。私への気兼ねからではなく、日常そうであることは、私というものを除外して他の男女と話を交している態度を見れば察しがつくのである。

「エツヘツへ。まったく、どうも、恐縮です」

と、はじめだけ、ちょつと、てれたが、あとは、もう、わるびれなかった。

「実は、なんですよ。これも、世を渡る手なんです。私は、例の男娼じやアありません。

なまじつか、あんなことをしたり、女ぶろうとするのが、いけませんので、全然そうでないところに、皆さんが面白がつて、ひき立てゝ下さるコツがあるんです。はじめは、ほんのイタズラで、まア、仮装舞踊会みたいなもので、それがマアうけたというわけですか。

あんまり、うけやしません、何がさて私は、愚連隊になるだけの度胸はなく、そのくせ、愚連隊のハシクレに交らなくちやア、私なんかの生きて行かれる御時世じやアないじやありませんか。こうして女装してりや、誰も喧嘩をうりやしませんし、仲間の仁義で血の雨をくぐる必要ありませんや。その代り、チップをはずむお客もいませんが、この風態で無難に身をひそめて、まア、ヤミ屋の片棒をかついでいるというわけです。先日はどうも、麻薬で失敗いたしました、あれなんかも、私自身は、これっぱかしも用いたことがございません。ひどく健全なるもんでして、女房子供をなんとか養つて、エツヘツへ実は、女房も、私のこの女装については、知っちゃいませんのです」

彼の細君は、却々なかなかの美人なのである。然し、それだけ、威張りかえつて、非常に冷い

女であつた。

私が彼と知り合つた戦時中、彼は細君の実家が農家であるところから、そのおかげで人の羨む食生活をしており、完全に女房に頭の上らぬ状態でもあつたのである。そのことが焦りとなつて、一カク千金、彼のような小さなケレンのない好人物が賭場へ入りびたるうになつたらしい。教養のない女が生活の主権を握ると、まことにつけあがつて、鼻持ちならぬ暴君となるもので、彼が尻の下にしかれた生活ぶりは、私には見るに忍びがたいものがあつた。女房という暴君がなければ、彼は昔も今も実直なセンバン工であり、賭場へ入りびたつたり、女装してヤミ屋の片棒をかつぐ必要もなかったであらう。彼は国民酒場へ行列したが、小さなジョッキ二つのめば充分に酩酊し、余分の券はみんな私にユーズしたほど、酒についても無難な人物であつた。

彼は男装に變つて現われてきた。

「今宵は、ひとつ、ぜひ御案内致したいところがありますんで、エツヘツへ。いぶせき所ですが、私がお伴致しております限り、先生にインネンを吹つかける奴もありません。その点は御安心を願ひまして、人生の下の下なるところを、御見学願ひます」

「麻薬宿じゃないの。そんなの見ても仕方がないよ」

「どう致しまして。国法にふれる場所じやありませんや。エッヘッヘ。先生もいやに麻薬恐怖症ですな。ちょッと、お待ちなすつて」

彼は一人の女給と片隅で何か打ち合せていたが、まもなく一人戻ってきて、私を外へつれだした。

彼の店で強い酒をのんだせいで、私も大いに酔っていたが、見知らぬ土地の見知らぬ道を曲りくねって、案内された所は、新築したばかりの、ちょッと小粋な家であった。私は待合だろうと思つたが、そうではない。たゞの旅館なのである。そのあたりは、たしかに待合地帯ではなく、旅館のあるべきような地帯でもなかった。そのくせ部屋は待合の造りのようでもあり、立派な浴室があつた。ほかに、客はいなかった。

「ここは君の内職にやつてる店と違うのかい」

「どう致しまして。私なんか、何百年稼いだつて、こんな店がもてるものですか。ここは、マア、なんと申しますか、ここの主人も先のことは、目下見当がつかないのでしよう。今に料飲再開になる、その折は、という考えもあるでしょうし、何か考えているんでしょうが、今のところは、たゞの旅館、それも、パンパン宿ではないのです。だから、客もありませず、三四、知つてゐる者が利用する以外は、閑静なもんです」

私たちが酒をのんでいるところへ、彼が先程店の片隅で打ち合せをしていた女給がはいってきた。不美人ではないが、美人というほどの女でもない。たゞ背丈がスラリとして、五尺四寸ぐらいはあろうと思われ、ムツツリした、冷めたような女であった。

彼は女に酒をすゝめた。女はグイ／＼呷ったが、却々酔った風がなかった。ヨツちゃん、ヨシ子という女であった。

「実は、先生に前もって話しておきやアよかったです、目の前で、ザックバラン、隠し立てなく話した方が一興だろうと思ひましてね」

彼自身は人に酒をつぐばかりで、殆ど飲まなかったが、すでに酔って、目がすわつていた。

「この人は私と同じ田舎の生れなんです、父親が小学校の校長でしてね、女学校をでると、絵の勉強をしていたのです。そのうち、これが偶然でして、この人の東京の下宿の隣家が刺青の名人だったのです。今と違って、そのころは戦争中のことで、刺青なんてものを、人がさらにやるものじゃアない。めったにお客もなかったのですが、この人が奇妙な人で、紙に絵を描くだけじゃアつまらない、自分の身体にやってみたい、いっそ刺青をやってみたい、自分の手で自分の身体にやってみたいと考えたのです。そこで隣家の刺青の

名人に弟子入りして、とうとう、自分で自分の身体にやったのですが、やってみると、その出来栄えがつまらない。そりや、そうでしょう。ろくすっぽ稽古もやらずにやった仕事ですから、出来栄えがいゝ筈もないじゃありませんか。あげくに、どうしたと思います。

刺青の部分を自分で皮をはいだんです。幸いモモのいくらでもない部分でしたから、ちよいと昏倒したぐらいで、済んだんですがね。まア、そういった人ですから、並の人とは気性も違います。つまり、女ながらも、骨の髄から芸術家の根性で、それについてちやア、鬼のような執念があるわけです」

女は眉一つ動かさなかった。話は思いがけなく異様なものであるが、話の内容を本質的に納得させるような凄味がない。それは女の人柄のせいだ。本質的に、かゝる鬼の執念を持つ芸術家の凄味というものが感じられない。ジツと押し黙って、眉一つ動かさぬけれども、いかにもそれが薄っぺらで、今にも、チェツと舌打ちでもして、それが本性の全部のように感じられる女である。

「そんなわけで、気性が気性ですから、まア性格も陰性で、それに潔癖なんです。選り好みをしますから、お客もつかず、そうかと云って、パンパンをやるような人柄じゃアない。パンパン時代に、こんな気性じゃ、着物一枚つくるところか、食べて生きて行くことだっ

て難儀でさアね。ところが、この人が、ふだんから、先生のファンなんです。それでまあ、これを機会に、先生にお近づきを願って、文学の方で身を立てたいという考えもあるので、すから、御指導を願えたら、と、オセツカイのようですが、本人が黙り屋のヒネクレ屋と生きていますから、私から、こうしてお願い申上げる次第なんです」

彼の言葉には、マゴコロがこもっていた。単に紹介の労をとるというだけの性質のものではなかった。私の頭にひらめいたのは、彼と彼女との交情、二人は相愛の仲ではないかということだった。

ウカツに返事はできない。文学の指導、といったって、先方の才能の見当がつかなければ、どうなるものでもなし、第一、文学の指導という結論に達するまでの話の筋が、いわば芸術的因果物というような血なまぐさい奇妙なもので、穏やかならぬものである。

この又あとに結論があつて、私の妾にしろともいうのであろうか。不美人という程ではなし、スラリとのびた姿態にはちよつと魅力があり、押し黙り、ひねくれて、いかにも陰性な感じであつても、一晚なら遊んでもいいぐらいの助平根性はあつた。酔っていたから、助平根性は容赦なく掻き立てられても、穏やかならぬ話にこもる凄味はさすがに胸にこたえた。

「文学の指導たって、芸ごとは身に具わる才能がなければ、いくら努力してみたって、ダメなものですよ。それを見た上でなくちやア返事のできるものじゃアないね」

「然し、先生、こんなことは、ありませんか。かりにです、かりにですよ。いえ、かりじやアないかも知れません。天才てえものが氣違いだします。天才てえものは氣違いだから、ほかの人の見るこのできないものを見ているでしょう。それがあつたら、これはもう、ゆるぎのない天分じゃありませんか」

私はお人好しで温和なこの男が、こんなに開き直つて突つかゝるのを経験したことはなかった。私は内々苦笑した。私自身、精神病院から出てきたばかりだからであつた。

「天才だの氣違いだのと云つたって、君、僕自身、精神病院で、氣違いの生態を見てきたばかりだが、氣違いは平凡なものです。非常に常識的なものです。むしろ一般の人々よりも常識にとみ、身を慎む、というのが氣違い本来の性格かも知れないね。天才も、そうです。見た目に風変りだつて、氣違いでも天才でもありやしない。よしんば、ある種の天分があつても、絵の天分と、文学の天分はおのずから違う。絵の天分ある人は、元来色によつて物を見ているものだし、文学の天分ある人は、文字の構成によつてしか物を把握しないように生れついているもんです。だから、性格が異常だというだけじゃア、文学者の

才能があるとは云われないものです」

「然し、先生、今に分ります。分りますとも。先生とヨツちゃんは、たとえば、日月です。男が太陽なら、女はお月様、そういう結び合せの御二方です」

決然とそう云い放ち、やがて、うなだれた。

お風呂の支度ができましたから、という知らせで、私が一風呂あびてくると、寢床の敷いてある部屋へ通された。やがて女が一風呂あびて現われた。その時はもう王子君五郎氏は、この家を立ち去っていたのである。

私は、然し、女が私の横へねても、監視されているようで、ちょつと気持がすくんでいた。

「王子君は、日月と云ったね。日月とは不思議なことを云うものだ。あの人は、そんなことを、時々言うかね」

と、私は女にきいた。その時である。まるで、思いがけなく、ゼンマイのネジが狂ったように女が笑いだした。決して音のきこえる筈のない冷静な懷中時計が、突如として、目覚し時計となつて、鳴り狂いはじめたようなものである。

「あんな男のいうことマジメにきいて、何、ねぼけてんの。氣違いつて、あの人が氣違い

じゃないの。女装したりしてき。変態なら分るわよ。変態でもなんでもなくせに女装するなんて、頭のネジが左まきのシルシにきまつてるわ。私が自分のモモにホリモノをしただの、そのホリモノをえぐりとつたのと、あの人が知っているわけがないでしょう。みんなあの人の妄想よ。ほら、見てごらんさい。私のモモに、ホリモノだの、えぐりとつた傷跡だのがあつて」

女は私にモモを見せた。まったく、何もなかったのである。そしてモモを見せる女の態度というものは、完全なパンパンの変哲もない態度であり、おかげで私は俄に安心したほどであつた。

「君は、じゃア、絵描きの卵でもないのかね」

「まア、それぐらいのことは、私だつて、なんとか、なんとか、それも商売よ。でも油絵の二三枚かいたこともあつたわよ。あんまり根もないことを云つたんじゃア、この社会じゃア、自分が虚栄だから、人の虚栄を見破るのも敏感なものよ」

話しだすと、先刻までの押し黙つた陰鬱さは薄れて、女は案外延び延びと気楽であつた。然し、私には、どうも解^げせなかつた。病院へ麻薬を持って見舞に來た時から、どこにも気違いらしい變つたところはなかつた。元々気違ひはそうである。私は精神病院で、それ

を胆に銘じてきた。発作が起きた時でなければ、見分けのつくものではないのである。いわば、あらゆる人間に犯罪者の素質があるように、あらゆる人々に狂人の素質があると考えてもよい。狂人は限度の問題だという見方もありうるほどである。

私は精神病院をで、以来、それまでの不眠症にひきかえて、ひどく眠るようになった。尤も、東大から催眠薬を貰っており、これは暁方になってきいてくる性質の催眠薬であった。朝食をとつて、又、ひと眠りするるのが習慣になっていた。

私は翌朝目がさめると、朝食の後、女を帰して、私だけ、もう一眠り、ねむつた。ぐつすり眠つた。その前日まで、仕事して、過労があつたせいもあつた。

目がさめると、もう午^{ひる}すぎだ。私は宿の人に頼んでおいたので、風呂がわいていた。風呂からあがつて、酒をのんだ。この旅館は、まだ女中がおらず、主人夫婦だけ、子供もないのである。

「どうも、王子君には、驚いた」

私は宿の主婦に話した。

「あの人の女装にも呆れたが、ゆうべの話しぶりが、どうも、私には解せなくてね、女がモモにホリモノをして、出来栄が気に入らなくて、肉をえぐりつつた、という。これが

全然嘘つパチなんだが話しぶりの真剣さは、凄味があつて、ちょっと、嘘なんてものじゃアなかったね。モモをえぐりとつたという件は、女とねれば、忽ちバレることなんだし、どうも、あの人の気持が分らない。女は王子君を気違いだと云つたけれども、昨夜の一件をのぞいて、気違いらしいところは見当らないのでね。女と相愛の仲かと思えばそうらしくもなし、むしろ女に甜められきつてい^なるという風なんだね」

主婦は静かに、うなずいた。この家が、旅館とも、待合とも、料理屋ともつかないものであるように、この主婦も、商売ずれのしたところがない。そのくせ、やっぱり商人あがりでもあるような、わけの分らないところがあつた。

主婦は間の悪そうな笑いをうかべたが、真顔に返つて、

「キミちゃんが毎晩のようにお客さんをつれこんでくれますんでね。こんなことは申上げたくないのですが、気違い、或いは、まア、気違いの一種なんでしょうかね。男のお客様によつて、女はそれぞれ違うんですけれどもね。これは男のお客様の好みもあるでしょうが、キミちゃんが殿方の人柄に应じて選んだり、キミちゃん自身の好みというものもあるのかも知れません」

ここまで話してきて、主婦はちよつとガツカリした顔付をして、言葉をきつた。

「でも、キミちゃんが、女の子をお客様に紹介する話というのが、いつも、おんなじなんですよ。今も仰有る通りの、モモのイレズミをえぐりとった、というんですがねえ。それから、もしや、日月なんて申しやしませんでしたか」

私はいさゝか茫然たるものだった。

「えゝ、えゝ、云いましたね。男が太陽、女がお月様、一對の日月とね」

私のシヨゲ方はひどかったのである。女が絵の天才、私が文学の天才、それで日月、こう思いこんでいた私の甘さは馬鹿のようなものである。

「日月というのは、なんのことですか？」

主婦は又、クスリと、ガツカリした笑い方をした。

「日月様とでも申すんでしょうか。キミちゃんが思いこんでいる宗教なんです。男と女、それが日月。でもねえ、キミちゃん自身、男のくせに女装して、つまり、自分が一人で日月をかたどっているという思いこんだ気持もあるんです。そのほかに、とりたてゝ変ったところもないのですし、根は氣立てのよい、おとなしい人なんですけど、ねえ」

茫然たる私に、主婦はなんでもない顔付でつけたして云った。

「キミちゃん自身が、自分のモモの肉をえぐったことは事実なんです。キミちゃんのオカ

ミさんが、人間の肉をたべたいとか、云ったとか、これは噂ですけれども、色々曰くがあったんでしょうが、キミちゃんが思いつめたアゲクに、自分のモモの肉をえぐってオカミさんに食べさせたんだなんて、まア、噂ですから、真偽のほどは分かりません」

私は二の句のつげない状態だった。私自身が精神病院をで、まだ一週間ほどにしかない日の話なのである。

私は真偽をたしかめたい気持ちにもならなかった。まるで、すべてが私の悪夢にすぎないような気持であつた。私には、すべてが割りきれなかったが、割りきってみたいとも思わなかった。

そして茫然と自分の家へ戻つたが、それから三日目の新聞に、麻薬密売者の一味があげられたという記事があり、その一人に、王子君五郎という名があがっていた。私は今もお、妙に溜息がとまらぬような思いである。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 07」筑摩書房

1998（平成10）年8月20日初版第1刷発行

底本の親本：「オール読物 第四巻第七号」

1949（昭和24）年7月1日発行

初出：「オール読物 第四巻第七号」

1949（昭和24）年7月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：砂場清隆

2008年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日月様

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>